

ドイツにおける教養とは

稗 田 睦 子

1 はじめに

教養教育の起源は、中世ヨーロッパで成立した自由7科（文法、修辞学、論理学、算数、幾何、天文、音楽）であるといわれており、現代におけるアメリカの大学で行われているリベラル・アーツ教育は、この自由7科の伝統を引き継いでいる。本編では、教養教育が誕生したヨーロッパにあり、独自の教養教育を発展させていたドイツにおける、現在の教育制度一般および教養教育について報告する。

2 ドイツにおける教養とは

ドイツにおいて日本語の「教養」に該当する言葉は *Bildung* である。*Bildung* の理念は、18世紀末から19世紀初頭に成立したと言われており、「人間の認知能力の形成や開発を担う、人間の自己活動における自己開発」という概念であった。時代を経て、「自由7科」という学問体系が根付き、これが後に、エリートとして身につけるべき基礎的な知識を意味することとなったという。実は、この「ドイツ的教養」が大正時代の日本の「教養」に大きく影響を与えたといわれている。

3 ドイツの教育システム

では、現在のドイツにおいて「教養」はどこで養われるのであろうか？ それを知る前にまず、ドイツの教育制度を理解する必要がある。ドイツと日本では教育制度が全く異なる。6歳で日本の小学校に当たる基礎学校に入学し、卒業するのが10歳。この時に、将来の職業に応じた学校を選択しなければならない。ドイツの教育制度は非常にシビアであり、10歳で自分の将来を決めなければならないうえに、基礎学校1年生から落第制度がある。基礎学校卒業後、親の意向や学校での成績によって、職業訓練を受ける5年制の基幹学校、職業専門学校への進学を目指す6年制の実科学校、大学進学を目指す8～9年制のギムナジウムのいずれかを選択する。これらの

学校の中で教養教育を担っているのがギムナジウムである。教養教育はギムナジウムの役割であり、大学入学に値する教養を身につけられたかどうかは、アビトゥア（大学入学資格試験）とギムナジウムの学業成績によって評価される。

アビトゥアは、記述試験と口述試験で構成される。州によって、試験の科目数が異なる。記述試験は試験時間が長く、数学は4時間、国語は5時間かかるといわれている。たとえば国語（ドイツ語）の場合、文学に関する基礎知識やヨーロッパの文化史など、基本的で幅広い知識が問われる問題となっている。例えば、2つの詩の内容を分析させ、詩作品間の比較を論述させる問題が出題されたり、文学作品に登場する人物評価や自分の読書経験に基づいた論述問題が出題される。このように試験問題を見ても、日本のような暗記型ではなく、幅広い知識、思考力を問う試験問題であることがわかる。

4 ドイツの大学では何を学ぶのか？

前述した通り、ドイツでは「教養」は大学入学前、ギムナジウムで身につけるべきであるという考えであるため、ドイツの大学では「教養科目」が存在しない。したがって、大学生は入学直後から専門科目のみを学ぶカリキュラムになっている。また、多くの大学では、主専攻1＋副専攻2あるいは主専攻2の選択する制度が設けられており、2つ以上の学問分野を学ぶ仕組みになっている。この点から見ても、高度で幅広い知識が習得できる環境であるといえる。

5 終わりに

「教養」とはどのようなものなのか、どのようなものであるべきなのかを考える上で、ドイツの教育制度、教養に対する概念を知ることは参考になるのではないのだろうか。また、ドイツだけに限らず、様々な国の取り組みを知り、良い点を我々の教育に活かしていくべきであろう。

参考文献

- 1) 田中文憲、「ドイツ的教養」、奈良大学紀要、第41号、p13-38、2013年
- 2) 木戸芳子、「ドイツ語のアビトゥーア試験：その試験基準と出題例」、研究紀要（東京音楽大学）、32巻、p65-88、2008年
- 3) 小松君代、「ドイツにおける学校教育と職業教育」、四国大学経営研究所年報、第21号、p11-19、2016年
- 4) 沼尻正之、「現代ドイツにおける高等教育の問題：大衆化社会化の中での大学と教養」、京都社会学年報、第3号、p1-20、1995年